しくはセルジュークとの戰ひを記さず、然も此の年より後ほゞ十五年にして、セルジューク家のサルタン・サンジャールが黑契丹のグルカンの爲めに大敗したることを記せり」と註したれど（Mediæval Researches. I. 245, note 524）然も忽兒珊は之をホラズムシャーと見るよりもホラッサン（Khorassan）の音を寫したりとする方が遙かに適當なるのみならず、本文の紀年はもとより信用するに値せざること上述の如くにして、當年既にサマルカンドに至りてかゝる戰ひを生じたることは到底信ず可らざることなりとす。

西方の史家にして大石とホラッサン軍との戰ひを最も早く記せるものは亞剌比亞の史家イブン・エル・アチル（Ibn el Athir 一一六〇―一二三三）なり。其の述ぶる所によれば「回曆五二二年（一一二七―一一二八）カシュガルの境上に、跛者と綽名せられたるシン（Sin＝支那）のグルカンは、大軍を率ゐて現はれぬ。當時カシュガルを支配せしアーメッド（Ahmed）は軍を集めて敵を進擊せしも敗死せり。グルカンが支那を去りてツルケスタン（シル、アム兩河間以東のツルキスタンを指せるなり）に至りし時、既に彼より以前に此の地方に移りたる同國人ありて、ツルケスタンの諸方の君主に仕へ、其の東境の守禦に當りたりしが、大石の至るや此等の人々は皆彼に附し、グルカンは其の助けによりて全ツルケスタンに主權を立つるを得たりき、……其の後グルカンは當時モハメッドの子マームード（Mahmud）の治めたるマヴェランナールに軍を向けしが、五三一年九月（一一三七年五月）マームードはホージェンドより進みて之と戰ひしも、利あらずしてサマルカンドに走り歸り、全國をして武裝せしめ、またサルタン・サンジャール（セルジューク家の）に助けを請ひ、異教徒討伐の連合の爲に全回教徒を招集せんことを懇請しぬ。茲に於て援軍はホラッサン、マザンデラン、セジスタン、ガズナ其の他の回教國より集り來り、一一四一年にサンジャール自から其の軍を率ゐてアム河を渡れり。されどグ